それでも私はここにいる

西崎想

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それでも私はここにいる

【Ｎコード】
Ｎ７２０８Ｚ

【作者名】
西崎想

【あらすじ】
一人乗りの、宇宙船が故障。不時着した、惑星。
空気はある。岩石の塊の、この星に、降り立ったミュシュに、どんな運命が待っているのか？ミュシュのどうしようもない、葛藤の旅が始まる。

不時着

私は、ミュシャ。

一人乗りの、宇宙船が、故障。

仕方なしに、この惑星に、不時着した。

ここはどういう星なのだ。

宇宙船から、見ているだけでは、ラチがあかない。

宇宙船から降りてみる。

空気はある。

地面は、赤い、岩石だ。

水？

それは、調べてみなければ。

生物はいないか……？

幸い、宇宙船は爆発を免れている。

私は、宇宙船から、微生物がいないか、検査できる、道具をとって来た。

この星は、地球と、少し違うだけで、生物はいそうだ。

私は、大声で、歌を歌った。

歌いたい気分になるのだ。

この、不安を、消したくて。

歩こう。カタツムリと、共に

ミュシュは、荒野の土を試験管に入れた。

カラカラカラ……、

土と、液が混ざりあう。

微生物は、……いた。

これで、生命の存在があるという、確かな手がかり。

さあ、

荒野を、……行こう。

ミュシュは歩き出した。

生命の宝庫、海、森を見つけに、

さあ、怖がることはない。

大陸がミュシュのまえに広がる。

「……カタツムリ」

ミュシュの手にはカタツムリがあった。

この、大きな大陸に、一人、

「私を……みてて」

そして、そのカタツムリを、自分の肩に……。

昔、ミュシュは、カタツムリ……とはいわず、ぬめり系は大の苦手だった。

そのミュシュも、この場では、心強い、仲間だ。

一緒にいこう。

そう、ミュシュは思っているようだった。

空は青い。

地平線は、遠くまで、見渡せる。

と、言うことは、そこに山はなかった。

青い中に、少し赤く、空は変わりつつあった。

日が沈む。

ミュシュは、持ってきた、荷物の中の一つに、「寝袋」があった。

それを、広げる。

まだ、何にもわからない。

そのうちの、夜。

それは、この何もわからない星に対して、強い、「恐れ」を抱かずにはいられない。

カタツムリは、そのまま肩に、

夜を……迎える。

二つの月

夜の星。
怖いくらい、暗闇だ。

ミュシュは、なかなか眠れない。
それもそうだろう。怖いのは当たり前だ。

星を見上げる。
ここの星は、月が二つある。
大きさも、少し違う。

星は、綺麗だ。
空気が澄んでいるから。

ここの気温は、今、１５度。
まあ、過ごせる気温の星でよかった。

ミュシュはそう思っていた。

カタツムリが、いつの間にかいなくなっていた。

はあ、

と、ミュシュはため息を吐いた。

なにかと一緒にいないと、さみしい。
そう、ミュシュは思っていた。

少しずつではあるが、ミュシュは眠くなってきた。

そして、目が覚めると、夜が明けていた。

眠ることができてよかった。

ミュシュは、ほっとした。

歩き出そう。

どこか、住みやすそうなところ、

いや、自分の、気持ちが安定できるところ。

それが、大事だ。

私は、まだ死にたくはない。

それに、私には、好奇心がある。

ここは、どんな星か。

死ぬのはそれからでも遅くない。

歩こう。

カニと水

日が昇った。

よし、
今度は、何かを見つけよう。
そう、私の心に響く、何かを。

歩いていると、植物があった。
ここは、森みたいに、いっぱいの植物がある。

ここで、何か食べるものを見つけられたら……。

この実は……、
鑑定してみる。

……

だめ。

はあーっとため息が漏れる。
いやいや、頑張らないと……。

もう一つ、

今度は、花。

……

いけそう……。

食べてみる。

結構美味しい。
まとめて、摘み取る。

これは、食べると、口がスーッとする。
ミント系か。

もう少し行くと……。

カニみたいな、虫がいた。
歩みも遅い。
手を伸ばす。

つかめた。

「一緒にいこう？」
そう言い、肩に乗せた。

サーー……、

なんだろう……
まさか……。

そう、そのまさかだ。

水。

よかったあ……。
ミュシュは、安堵した。

飲んでみる。

美味しい！

「はあ～」

ミュシュは岩に座った。
水の中を見て……、
周りを見て……、

泳ごう……かなあ……。

「@；・。：？」
なんか、カニがしゃべった。

「なに？カニさん」

「¥@、・＾」
わからない。

「私の言葉は分かるの？」

聞くと、

「ー¥；、@！」

なんかしゃべる。

「カニさん、私みたいな体の動物、いない？」

すると、カニは、ミュシュから地面に飛ぶと、

サササーー。

と、走り出した。

ヒューマンタイプ

カニの後を追うと、
何か、生き物が住んでいる気配がしてきた。

マキだ、
火を起こしているのは、明白だ。
それと……、

なにで出来ているのかは解らないが、容器が積んである。
「カニさん！」
カニは、その声で止まった。
「ありがとう、その……」
カニは、また走り出した。
「待って」

その後を追うと、
「ｌ¥ｐ@；・」
「；、¥@ｐ¥」
なにか、会話のような……、

しかし、ミュシュは驚いた。
「入りなさい」

私の国の、イタリアの言葉だ。

「……はい」
ミュシュは、ドキドキして入ると、

たくましい身体をしていて、しかし、すごく毛深い、人に似た者が座っていた。

「僕は、オイル。君は？」
ヒューマンタイプが言った。
「私は、ミュシュ」
ミュシュは、言葉をつづけた。

「なぜ、貴方は私の言葉が解るの？」
「それはね……」

なにやら、機械を手に取った。
「この、通称”通訳さん”でね」
「通訳さん……すごい」

「君、可愛いね」
「……ありがとう……貴男も、かっこいいですね」
オイルが微笑んだ。
「君と僕は、美意識が合っているようだね」
「ええ……そうかもしれない」
「君の、乗ってきた宇宙船。見せてはくれないか？」

「……ええ、いいですけど……」
そう、ミュシュが言うと、オイルは立ち上がった。

宇宙船完成。そして……

オイルと一緒に、ミュシュは宇宙船にたどり着いた。

「……君の惑星はまだあるのかい？」

「ええ、あるわ」

そう答えるミュシュ。

「そうか、ならば、この宇宙船をなおしてもいいけど」

「本当！？できるの？」

ミュシュは驚いて尋ねた。

オイルは微笑んで頷いた。

「僕の側近にそう言うものを、いくつも直している人がいるんだ」

ミュシュはよかったあ……と言って喜んだ。

それから、数か月が過ぎた。

ミュシュは、次第にオイルに惹かれている自分に気が付く。

それは、彼の優しさが本当だったからなのだが……。

「ミュシュ、宇宙船を見に行かない？」

「ええ、一緒に行きましょう」

そして、宇宙船が完成した。

「これで、君は帰れる。行くかい？」

ミュシュはしばらく考えていた。

そして、

「私は……ここに残るわ」

「え！？」

「私、ここで、過ごすわ。……貴方と、居たいの」

オイルは、そう言われると、安堵のため息を吐いた。

「良かった、君が帰ってしまったら、どうしようと、思っていたんだ」

「オイル、いつまでも、ここへいてもいいかしら」

すぐに、オイルは頷いた。

「ああ、君が良いのなら」

「私、宇宙船が完成しても、それでも私はここにいるわ」

二人は抱き合った。

この宇宙には、意外に遭難すると、こうして帰るのを辞めるものもいる。

そういうことだ。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7208z/

それでも私はここにいる

2011年12月29日08時45分発行